

大切なのは今ある命だろうか、それともこれから生まれてくる命だろうか？

Tehreem Hasan Syed さん（パキスタン）

パキスタン農村部の平均的な家庭では、短い間隔で出産が繰り返される傾向があります。女性が大きなおなかを抱えて、幼い子どもたちの世話をし、あらゆる家事を切り盛りする姿は痛々しいものです。

カリードはわが家のメイドの娘ですが、教育のない階層でよくあるように、早くに結婚しました。結婚して最初の5年で、娘2人、息子1人の出産と2度の流産を経験しました。家事と子育ての負担がのしかかってきて、毎日息をつく暇もありません。これ以上がんばれそうにないと彼女も認めています。そんな彼女に対し夫の母親は、もうひとり男の子をとせまります。このように息子を産むことにこだわるのはパキスタンの農村社会では普通のことです。最近、また妊娠したという天災が降りかかりました。

妊娠を繰り返す背景にあるのは、大家族への願望、そしてとりわけ男のあとつぎへの執着です。男児が授かるまで何度でも出産を繰り返す家族の話はめずらしくありません。この慣習は家族からの圧力が原因となっています。

女性が、特に妊娠・出産に関連して健康を損ないがちであるもうひとつの要因は、農村地域では、官民間わず医療スタッフや補助スタッフが不足しているということです。この問題に対し、草の根レベルで女性や子どもにサービスを届けるため、政府は1984年にレディ・ヘルスワーカー（LHW）グループを発足させました。

出産を繰り返すことで女性の健康状態はひどく低下し、それが乳児の死亡と密接に関連しています。その結果、次の妊娠に悪影響を及ぼします。パキスタンにおける女性の保健医療状況と質の分析（アジア開発銀行1997年）に関する報告案は、妊産婦の死亡について次のように詳しく述べています。

毎年合計約3万人の女性（38人に1人）が妊娠関連の合併症で死亡しています。こうした妊産婦死亡の1件につき、その10～12倍が妊娠中の不適切な管理のせいで一生残る身体障害を負っていると推定されます。

出産をひんぱんに繰り返すと、女性の体内がかなりの欠乏状態に陥り、身体は虚弱になり、骨がもろくなり、免疫が低下します。身体が十分に回復する時間がないうえに、手にかかる大勢の幼い子どもたちの世話で精神的にも悪影響が生じます。ストレスで疲れ切った母親たちは、自身の健康をかえりみる暇もありません。人生のこんなにも大変な時期に、きゃしゃで女性特有の体質でありながら、寛容であることに驚きを感じます。

ひんぱんに出産を繰り返すのは、パキスタンの都市部では家族計画といった方法や避妊普及率の増加によって急速に改善されています。パキスタン避妊普及率調査（1994～1995

年)によると、避妊薬普及率は1991年の11.8%から17.8%に上昇しており、総出産率は1990年代初めの1世帯につき6.1人から5.4人に減少しています。しかしこれはまだ世界の低所得国の平均を上回る数値です。

都市部では教育が、ひんぱんな出産という習慣を抑えるのに役立っています。教育の普及により、女性は妊娠の間隔を開けなければリスクが生じるということを認識するようになってきました。適切な期間を置くことで、身心ともに次の赤ちゃんを授かるための準備ができるのです。

パキスタン都市部の状況は変わってきており、農村部ほどには女性が繰り返し妊娠することはありません。人生のどの段階にあらうと年齢がいくつであらうと女性は生殖のためにのみ存在するのだと思い込んでいるこの社会の考え方を変えていくことが必要だと私は思っています。

造物主がこの世に生をもたらすのを手伝うということは、女性がもつ素晴らしい特権ではありますが、それと同時に自身の健康と人生を大事にすることも重要なことであり、それはまた義務でもあるのです。ひんぱんに出産を繰り返すことは女性の身体と心と精神に破壊的な後遺症を残すものなのです。



カリーダの家族の典型的な夕刻の風景



日々の雑事のように



ひんぱんに妊娠すると作業負担が増します。農村地帯の女性にとって大打撃です。